



# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticano の転載許可済  
©1987  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

〈聖木曜日〉

## 神は御自身を 否むことはない

1 「いいえ、決して私の足を洗わないでください。」ヨハネ13・8)

と関わりがあります。もうすぐ私も典礼の定めるところに従って十二人の司祭の足を洗います。

聖ペトロ大聖堂での朝の祈りのあと、私たちはこの「全教会の母」なるラテラノ大聖堂へとやって参りました。外ならぬこの場所で、キリストが御体と御血の秘跡をお定めになったあの崇高な瞬間に立ち合いたいと望みつつ、教会は聖体の秘跡によって、日々その生命を新たにします。

「父が自分の手に万物をゆだね、自分は神から出て神に帰ることを知っておられたイエズスは、食卓から立ち上がって上衣を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰にまとい、それからたらいに水を入れ、弟子たちの足を洗い始められた。」(ヨハネ13・3-5)

「全教会の母」。このバシリカこそ、最後の晩餐を祝うに最もふさわしい所ではないでしょうか。そしてキリストや弟子たちと共に、教会誕生の時を過ごすためにも。教会は、神なる花むこの死という秘義の中で生まれました。「……私の血による新しい契約である。」(ルカ22・20)

「けっして私の足を洗わないでください」と。

2 最後の晩餐の席での秘跡の制定。これは多くの点で、主が使徒たちの足をお洗いにしたことに

か、やはりペトロはこんな風にキリストに反対したことがありません。救い主・神の子への信仰を告白したあとのこと、イエズスが御自身の受難を予告なさるや、ペトロは反対して言い出したのです。「主よ、

そんなことが身の上で起こることはありません。」(マテオ16・22)と。イエズスが生ける神の御子なら、なぜ苦しみを受ける話などなさるのか。十字架上で死ぬなどと、なぜ言われるのだから。神は万物をお治めになる方、天と地の主であるというのに、一体、人間の手に落ちて苦しまれるなどということがあり得るのだろうか。人間が、神を死に至らしめたりできるのだろうか。

キリストはペトロを厳しくお叱りになりました。このペトロに対する叱責ほど仮借ない言い方をなさったことは外にないでしょう。

けれども、最後の晩餐の席にあってはペトロを叱りつけたりせず、ただ穏やかにたしなめられるだけでした。言い聞かせるかのように、「もしあなたを洗わないなら、あなたは私と何のかかわりもなく」と。(ヨハネ13・8) そこでペトロは師の言葉に従います。

3 それにしても、なぜペトロは一度断ろうとしたのでしょうか。フィリッポのカイザリア地方でイエズスが受難と十字架の死を予告なさったとき、なぜそれを否定したのでしょうか。

きつとキリストの神性を見極めていたからにちがいありません。「あなたはキリスト、生ける神の子です。」(マテオ16・16) 測り知れない神の秘義、すなわち「力ある者、賢い人には隠されるが、小さな人々には現わされる全体的こと。」(マテオ11・25 参照)を、ペトロは知っていたのでしよう。

ところで、「子が何者かを知っているのは父のほかにない。」(マテオ11・27)のですから、ペトロに御子の神性をお示しになるのは御父です。それなのに、なぜ、キリストが、

□神は万物をお治めになる方、天と地の主であるというのに、一体、人間の手に落ちて苦しまれるなどということがあり得るのだろうか。人間が、神を死に至らしめたりできるのだろうか。

神の御子が、人間の手にかかって死に渡されることができるとは、どうしてそんなことを仰せになるのでしょうか。神は存在するものすべてにとって絶対的な主ではありませんか。生命をつかさどる御方ではありませんか。

生ける神、主なる神の御子が、なぜ今、奴隷のように振舞おうとなさるのですか。使徒たちの足元にひざをつき、彼らの足をお洗いになるとは。ペトロの足元に身をかがめられるとは。

ペトロは自分自身に対し、十二使徒に対し、そしてキリストに対して、それまで抱いていた神についての考えを守ろうとしました。神と、神の子についての考えを。

世界中の多くの人々が、このように自分の持っている神についての考えを固守してきましたし、今もそうしています。何と大勢の人々が、伝統を、文化を、宗教を、自らの神の概念を、弁護してきたことでしょう。神は最も完全な御方、至高・不可知の存在であって、万物の絶対主である。神が人間になるなど不可能だ。仕えようと望み、弟子たちの足をお洗いになることなどあり得ない、十字架上で亡くなることなどあるはずもない……と。

4 きょう記念しているあの晩の、ペトロのキリストへの対立は、聖体制定の序曲となりました。簡単に言って、神は愛です。愛であるがゆえに、神は世界を造り、御自分に似せて人間をお造りになった。愛であるがゆえに、神は契約の神と

愛によって、神は人となられました。御独り子を与え給うほどこの世を愛し、人々に永遠の生命を与えようとなさったのです。(ヨハネ3・16)

### 神を受けいられるか

参照)

十字架にかかることをお望みになつたのも愛のため、世の罪をあがない、「血による」新しい永遠の契約をうちたてようとお考えになったのも愛のためです。

御自身愛であるゆえに、主はあの晩、聖体の秘跡をお定めになりました。

愛は、善を伝えること以外に目的をもちません。そして、善とは、仕えたいと望むこと。

この望みに動かされて、全能の神は弱いものとなり、有罪判決を受けて十字架上の死に引き渡されることをもいとわれなかったのです。弱く、無防備なパンの形をお取りになりました。「これはあなたたちのために与えられる私の体である。私の記念としてこれを行なえ。(ルカ22・19)」

人間は、十字架につけられた神を受け入れることができるでしょうか。聖体の内に在る神を、受け入れることができるでしょうか。これこそ、聖週間後半の三日間の核心、イエズス・キリストの過ぎ越しの秘義と本日祝う最後の晩餐の根底にある問いかけです。

問いと共に答えもここにあります。神に注目する人間の思いはさまざまな径を通ります。近づくことのできないような所へも行き着きます。人間には、神に背を向け、神を否定することさえできるのです。

それでも、すべてを超える神は、「御自身を否むことはない。(ティモテオ②2・13) 神が神でなくなることはありません。愛が愛でなくなることはないのです。」

(八六年の聖木曜日)

# 神の子、救い主、イエズス・キリスト

## キリストシリーズ ②

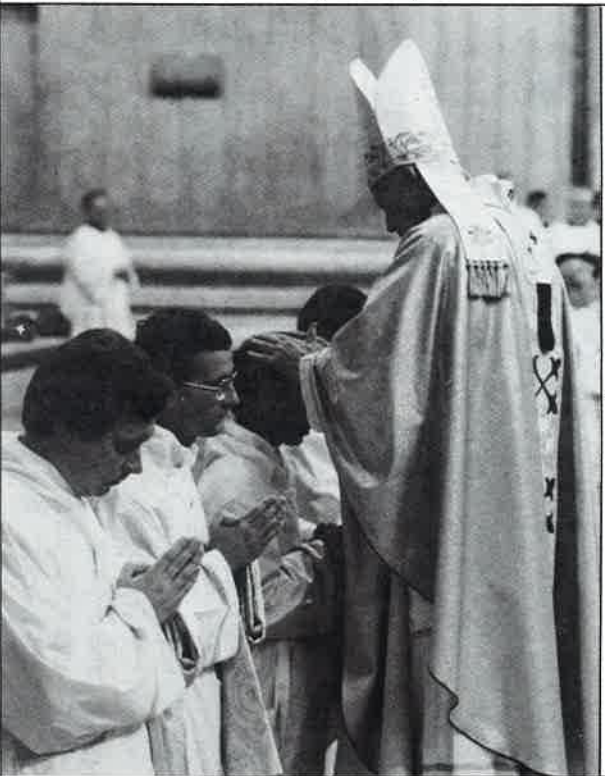
1 前回のカテケージズで、キリスト教最初の信仰宣言に従ってイエズス・キリストについて考える新しい段階に入りました。使徒信経は宣言しています。「神の御独生子、イエズス・キリストを……信じます」と。ニケア・コンスタンチノール信経は、神の子としてのイエズス・キリストの出自についてこの上なく厳密に定義したのち、この神の御子は「われら人類のため、またわれらの救いのために天よりくだり、……人となり給えり」と言明します。

周知のとおり、キリスト教の核を成すのは次の二つの真理です。すなわち、イエズス・キリストは神の御子にして人の子である。(キリスト論的真理)これが一つ。父である神は、御子にして世の救い主であるキリストによって人類の救いを成し遂げられる。(救世論的真理)これが二つ目。

2 悪の問題、なかでも罪の問題を扱うにあたり、すでに救い主イエズス・キリストについてお話しする下地はととのえてきました。実に救いと、悪、とりわけ罪からの解放を意味しているのです。聖書に記された啓示によると、(創世の書第三章十五節にみる)福音の原型とも言うべきものに始まり、人間の存在にまつわるあらゆる悪と罪から人間

3 「イエズス」という名は、もとをたどれば「ヤーウエが自由にする」、救う、助ける、という意味です。バビロン捕囚以前には、この名は Jehosua と呼ばれていました。至聖なるヤーウエの名と共通の語源を持つ、神の名です。バビロンから戻ってからは Jeshua という省略形が用いられます。七十人訳ギリシャ

### 意味深い名前



語聖書は、これを Iesous と書き表わしており、英語の Jesus はここから来たものです。旧約・新約の時代を通じて、この名はしばしば見られます。たとえば、モーゼの死後イスラエルの民を約束の地へと導いたヨシヤ Joshua がそうです。「彼はその名にふさわしく、神に選ばれた人たちを救い、(…)イスラエルをその地に迎え入れた。(シラの書46・1)シラの子イエズスは、シラの書の編著者です。(同50・27) ルカ福音書の救い主の系譜においては、「エルの子イエズス」の名が見られ、聖パウロの協力者の中にも、「ユストと呼ばれるイエズス(コロサイ4・11)という人物がいました。」

4 しかしながらこの「イエズス」という名がナザレトのイエズスの場合ほど深く完全な意味をもったことはかつてありません。それは、天使がマリアと(ルカ1・31参照)ヨゼフに(マテオ1・21参照)告げた名でした。ところで、公生活の始めにあたりイエズスの名は、当時通っていた普通の意味で受け取られていたのです。「モーゼが律法に記し、預言者が書き記している人に出会った。ヨゼフの子、ナザレトのイエズスという人だ。」最初の弟子の一人フィリッポがナタナエルにこう言うと、「ナザレトから良いものが出るのか(ヨハネ1・45)46」という返事が返ってきました。イスラエルの子らは、ナザレトをあまり高く評価していませんでした。それでもイエズスは「ナザレ人(マテオ2・23参照)、



# 説教・講話・書簡等の抄訳

「ガリラヤのナザレトから出た預言者イエズス(同21・11)と呼ばれ、ピラトが十字架につけさせた文句も、「ユダヤ人の王、ナザレトのイエズス(ヨハネ19・19)です」。

## 5

三十歳になるまで家族と共に住んでいた町の名前から、イエズスは「ナザレ人」と呼ばれていました。けれどもイエズスが生まれたのはナザレトではなく、エルサレムの南、ユダヤの一地方ベトレヘムだったのです。福音記者ルカとマテオが述べているとおりです。ルカの記述によると、ローマ当局から人口調査の命令が出たので、「ヨゼフはすでに妊娠していた妻のマリアとともに、ガリラヤのナザレトの町からユダヤのダビドの町ベトレヘムにきた。そこにいる間に、マリアは月満ちて初子を産んだ。(ルカ2・4〜6)

### 預言の成就

聖書の他の場所と同じく、ベトレヘムにも預言的な価値があります。ミカヤの預言(5・1〜3)に言及して、マテオはこの小さな町が救い主の生まれる所と記しています。「ユダの地ベトレヘム、おまえはユダの村々のなかでもっとも小さなものではない。わが民イスラエルを牧するかしらはおまえから出るからである。」(マテオ2・6) 預言者はつけ加えます。「その出はずつと以前、昔の日々にさかのぼる。(ミカヤ5・1) ヘロデの相談をうけた祭司と律法学者たちが、救い主誕生の地を尋ねにやって来た東方の博士たちに答えるため参照したのがこの預言です。」

マテオ福音書によると、「イエズスはヘロデ王のとき、ユダヤのベトレヘムで生まれました。(マテオ2・1) 第四福音書は再びミカヤの預言に言及して、「聖書には、キリストはダビドの子孫から、そしてベトレヘムから出ると言われているではないか」(ヨハネ7・42)と述べています。

## 6

これらの史実から、イエズスがパレスチナに住んでいた歴史上の人物であることは明白です。モーゼやヨシヤのような人物に歴史的の信憑性ありと考えてよいなら、イエズスの歴史的事実についてはそれ以上に確実であると言わねばなりません。福音書がイエズスの生涯について詳しく語っていないのは、その第一の目的が伝記を書くことではなかったからです。しかし、福音書を批判的かつ誠実な態度で読んでみると、ナザレトのイエズスが特定の

時代・特定の場所に生きていた歴史上の人物であるという結論に達します。純粋に学問的・史的観点から見ても、イエズスの肯定論者よりも否定論者の用いる神話論の方に驚かされてしまいます。今日でもこういう学者がいるようですが……。

## 7

イエズスの正確な生年月日については専門家の間でも意見が分かれています。西暦五三三年に修道士デオニシウス・エクシグウスは、年代の計算をローマ創建からでなく、キリスト誕生の年から数えることを提案しましたが、この計算は正しくありませんでした。つい最近まで、四十年程のズレがあると言われていましたが、この問題はまだ決着がついていません。

## 8

神の摂理の計画によりナザレトのイエズスは、救いを暗示する名、つまり「神が自由にする」という名を名乗りました。実際、その名の意味するおりの御方であつたから。すなわち、救い主。このことは、イエズスの幼年時代に詳しいルカ福音書の次の一節からも読み取れます。「……あなたたちのために

「神が自由にする。」昔から子供の名づけは両親の役目でした。ところがマリアの子イエズスの場合、すでに生まれる前からいと高き御方がその名をお選びになり、天使を通してマリアに(ルカ1・31)、そしてヨゼフには夢の中で(マテオ1・21)お告げになっていたのでした。「イエズスと名づけなさい」と、福音記者ルカは力強く語っています。「胎内に宿る前に、天使の告げた(ルカ2・21)名であつたのです。」

救い主が生まれたもうた。(ルカ2・11) マテオでは、「彼は罪から民を救う方である(マテオ1・21)となっています。これらは、新約聖書全体のなかで示され宣言されている言葉です。たとえば、使徒パウロはフィリッピンへの書簡の中で述べました。「そこで神はキリストを称揚し、すべての名にまさる名を与えられた。それはイエズスの御名の前に(…)すべてのものがひざをかがめ、すべての舌が(…)『イエズス・キリストは主である』と宣言するためである」と。(フィリッピン2・9〜11)

イエズスが称揚される理由は、勇敢な使徒が断言した次のことばに示されています。「救いは主以外の者によって得られません。この世においてわれわれの救われる名はそのほかにないからです。(使徒行録4・12) (一九八七・一・十四)

さあ、御告げの天使に祈り、彼らを称えましょう。ことにマリアに向かって祈り求め、マリアをほめ称えましょう。「御告げを受けた御方」というすばらしい呼び名を冠して、マリアに願ひ、マリアを称えましょう。大勢の人になじみ深いこの呼び名をもって。ところで、大天使と聖母の間には、最も高貴な客人がおいでになり、すでに仕事を始めておられます。その御方を見出し、祈り、称え、礼拝しなければなりません。この御方こそ、告げられた神の御子御自身なのです。から。「恐れるな、マリア。あなたは神の御前に恩寵を得た。あなたは身ごもって子を産む。その子をイエズスと名づけなさい。それは偉大な

# お告げ

## 御告げの主人公はイエズス

主人公はイエズス・キリストです。人類の贖いという事業全体の中で、つねにただ一人の、真実の主役として働いておられるのはイエズスです。最初の瞬間、すなわち御託身の瞬間から、主役でありました。至聖なるマリアへの天使の御告げ、それに続く

マリアの承諾。そして直ちに「みことばは肉体となって、私たちのうちに住まれた」のです。(ヨハネ1・14)

従って、御託身は贖いの最初のみりでありました。肉体となつたみことばは、いまや託された仕事に取りかかる準備をととのえたのです。実にこの世においていられるとき、キリストは御父に向かって言われました。「あなたはいけにえも供え物も望ま



# 不変の教え

## 視力は人間生活に寄与する

みなさんの専門分野において、科学と医学はすばらしく進歩し、大きな喜びをもたらすと同時に大きな希望、つまり、ほんとうに役に立つ奉仕がしたいという望み実現への道をも開いてくれました。

声を大にして申し上げたい。「見える」ということは、人間に与えられた恵みの中でも、最大のものです。見えるおかげで人間は直接に大自然の美を楽しみ、人々の表情やふるまいを見て何を考えているかを悟り、意志を伝えあうことができるから。さらに、読むという行為を通して文化活動に加わることもできます。文化の大部分は、あらゆる種類の書物やその他の書かれたものに、表わされているからです。それはまた、発展しつつある視聴覚メディアの分野においても同じです。

方で、いと高きものの子と言われます。(ルカ1・30〜31) これが、福音書のなかで簡潔この上ない調子で描かれている御告げの場面、処女の受胎と神の御子の誕生の次第です。神の御告げは、天使によって、まずマリヤにもたらされ、次に夫ヨゼフ(マテオ1・20〜21参照)、それから羊飼いと東方の三博士たちに(ルカ2・10〜11、マテオ2・2)伝えられました。こうしてすでに誕生が告げられていた、生まれくる、あるいは生まれたばかりのその御子こそが「救い主」であります。イエズスとは、「救い主」という意味なのです。

## 芸術家への靈感

「彼は民を罪から救う方だからである。(マテオ1・21) 救いの目的という面から見ると、次のことがわかります。すなわち、御告げはあらゆる時代を通して全人類に向けられた言い尽くせぬ喜びの知らせであり、この中に、福音(良い知らせ)のもつ「良きもの」がことごとく集約され実現されているということが。

御告げの神秘はたえず芸術家たちを魅了し、あまたの有名な作品に靈感を吹き込んできました。ひとつだけ

## 視力は… 救いの 秘義の象徴



個人の自主的な活動範囲が広がり、健全な家庭生活、職業・社会生活を営むことができるのは、視力のおかげなのです。

身体はどこにも支障がなく、目もよく見える人にとっては、視力という恵みのありがたさがよくわからなういかもしれません。

★ ★ 反対に、目という重要な器官を患い、あるいはそうなる恐れに苦しんでいる人々は、「見えること」のすば

け例をあげるなら、ことに印象深いのは、アンジェリコの筆になるガブリエルとマリヤの神秘的な出会いの図ではないでしょうか。この超自然の出会いを取り巻く言語を越えた崇高さの中で、あたかも天と地が、マリヤの返事を待ちうけているかのようです。イエズスの姿には見られません。聖霊はおいでになり、処女の胎内に行なわれる大奇跡の用意がととのっています。およそ不可能といふことのない「いと高きもの」(ルカ1・35〜37)の力が、そこに臨在しているのです。しかしながら、少なくともはつきりとした目に見え

る形では、イエズスの姿はありません。ただ確かなのは、天と地がマリヤの返事を待ちうけているのと同じように、みことばも、密かに震える思いで、御父の聖旨を果たすべく、マリヤの答えを待っておりになるということ。人々に待ち望まれている当の本人、律法と預言者の告げる「民の希望」(創世49・10、イザヤ9・5〜6、ヨハネ1・45)である御方が、二人の高貴な人物は彼についてやりとりしています。そして、「なれかし」という返事が処女の口から発するやいなや、彼はおいでになるのです。(三・二十三)

★ ★ ★ ★ ★  
**お知らせ**  
 下記のバックナンバーは在庫切れのため、御注文の方にはコピーで替えさせていただきます。御諒承ください。  
 1981年3・6・11月号 82年4・10・11月号 83年8月号 以上。  
 ★  
 励ましの御言葉、御意見、御寄付等お寄せくださった方々に、紙面を借りて心から御礼申し上げます。  
 ★ ★ ★ ★ ★

らしさが容易に理解できるでしょう。治療と保護を求めて手を差し延べ、危険から救い出してくれる人々を求め、喜び、感謝しつつ、科学と皆さんの技術がもたらす恩恵を受け入れるのです。

イエズスは立ちどまり、父なる神から授かった御独り子としての力によって、その人を癒されます。イエズスは私たちにも、苦しむ隣人の前で足をとめよとお命じになっています。つまり私たち自身が、彼らの役に立つ真心をもった隣人になるようお望みなのです。これこそ善きサマリヤ人のたとえの意味するところ。司祭やレビ人のようにではなく、傷つき倒れ、一人ぼっちで放り出された人を、本当に、真実に見た、サマリヤ人のようになれと。(ルカ10・30〜37参照) 相手が助けを必要としている人であること以外は知らないながら、サマリヤ人はできるかぎりの手を尽くしてその人を世話し、回復させました。審判の日には、サマリヤ人の弟子とされるのは、助けを求めた兄弟、とりわけ病に伏す兄弟を受け入れ助けた人々(マテオ24・36参照)ではないでしょうか。

このように考えると、皆さんは、キリスト御自身がパレスチナの道沿いに見聞きされたことを目の当たりにすることができず。そこには大勢の盲人がいました。彼らの嘆願の叫びを、キリストは幾度耳になされたことでしょうか。エリコの盲人のよいうな「主よ、見えるようにしてください」(ルカ18・41)という叫びを。

★ ★ 必要としている人であること以外は知らないながら、サマリヤ人はできるかぎりの手を尽くしてその人を世話し、回復させました。審判の日には、サマリヤ人の弟子とされるのは、助けを求めた兄弟、とりわけ病に伏す兄弟を受け入れ助けた人々(マテオ24・36参照)ではないでしょうか。

キリストと、キリストの模範にならう教会とは、視力を害された人々の苦しみを軽減すべく努める皆さんのあらゆる尽力を高く評価し、激励したいと考えます。神がお与えになった素晴らしい能力のおかげで、人間は自然の仕組みを知り、なかならず、高度に複雑微妙なバランスを支えられた構造物——すなわち人体——の研究が可能になりました。科学者間の協力にも感謝します。科学上の発見を、こそって万人の手の届くところに置いてくださったからです。みなさんの手の中にある膨大な手段は、神が人類に注ぐ愛のあらわれです。神は皆さんの働きを祝福しておいでになり、全人類は皆さんの業績に対して、感謝しています。ピオ十二世が、一九四七年九月の第三十六回イタリア眼科学会の参加者に対し心からの感謝の言葉を述べたのもこのためです。「皆さんは人類の偉大な恩人です」と。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円  
 ■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要  
 郵便振替 神戸 3-72393





# セイドーの 教理出版物



ホセマリア・エスクリバー著  
精道教育促進協会訳(第8版)

## 道 (新改訂版)

「友、兄弟、父の信頼をもって、あなたの心の耳に話しかけています……なにかよい考えがあなたの心に浮かび、それがあなたの心をうつように……やがて英知と分別に富む人となるために。」(著者) 35ヶ国語、181版、約300万部を誇る現代の『キリストにならいて』。

B6変型判・272頁 1,200円(〒300円)



ホセマリア・エスクリバー著(第2版)

## 聖なるロザリオ

ロザリオは、キリストと聖母マリアの一生を黙想する祈りである。この書は、一度は心を神にあげ、詩篇作者のように「私の歩むべき道を示してください。わたしはあなたに魂をゆだねます」と叫んだことのある人、ロザリオの祈りの深さを再発見したい人のために書かれた。

ポケット判 600円(〒200円)



ホセマリア・エスクリバー著

## 知識の香

神学的な深さ、福音の教えと信徒の生活が密接に結びついた、実生活への応用方法、直截な語調と爽快な文体を特長とするエスクリバー師の名著。信徒の霊性の開拓者が、神との父子関係を基礎に、信仰生活の秘訣をあかす書。霊的読書として、また念禱・黙想の導き手として最適。

A5判・421頁 2,800円(〒300円)



ホセマリア・エスクリバー師との会見  
吉津喜久子訳

## 女性

ともすれば女性の特質を無視した諸説の多い今日、その女性の特質に深い洞察を加え、女性の尊厳と役割を簡潔に説く本書は、あらゆる人々に深い共感と反省の材料を与える。本書は著者が、女性誌『テルバ』の要望に応じて教会と社会での女性の役割について考えを述べた会見録。

新書判・113頁 750円(〒200円)



ホセマリア・エスクリバー著

## 神の朋友

本書に集録された18の説教は、キリストにつき従わんとする人々に、自然徳とキリスト教徳の全貌を示してくれる、神について話すと同時に神と語り合う言葉。体験に基づく教えであり、神学者の造詣と善き牧者の福音が一つとなっている。

B6変型判・432頁 1,600円(〒300円)



フェデリコ・スアレス著  
鮑 宗賢・平井英子共訳

## ナザレトのマリア

「キリストへ行く道はマリアを通る道だ。キリストに戻る道もマリアを通るのだ。」(『道』)キリストに倣う最上の方法は、聖母に習うことである。マリアほど忠実に御子のイメージを正確に再現した者はいなかった。著者は、歴史学者の目で聖母の生涯を黙想する。

A5判・291頁 2,000円(〒300円)



ルイス・ラベントス著(絵と文)  
村林祥子訳

## ペトロおじさんの仕事

キリストの教えを楽しく理解できる絵本。日々の自分の仕事に精を出し、祈りながら家族や友人を少しずつ神様に近づけるカトリック信者、ペトロのお話。どのような態度で仕事をすれば良い仕事ができ、また神に近づけるかをわかりやすく絵と文で楽しく解説している。

B6変型判・64頁 850円(〒300円)



フランシスコ・ルナ著

## 祈りと神の現存

祈りは難しいという人のために。祈りとは神と話し合うこと。ありのままの素直な心で神と話し合うこと。ただ単純、素朴に神と語り合うこと、これが祈りである。神の子であれば、時間を問わず絶えず神との会話を保っていなければならない。全てのものは主と共に分かち合うことができるのであるから。

新書判・157頁 900円(〒200円)

(キトリ線)

## 注文書

お名前：

ご住所：〒

☎

所属教会名：

書名	定価	送料	ご注文数
道	1,200円	300円	
聖なるロザリオ	600円	200円	
知識の香	2,800円	300円	
女性	750円	200円	
神の朋友	1,600円	300円	
ナザレトのマリア	2,000円	300円	
ペトロおじさんの仕事	850円	300円	
祈りと神の現存	900円	200円	